A Study on the Origins of Football in Britain

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23435

英国におけるフットボールの起源に関する研究

秦　　修　司

A Study on the Origins of Football in Britain

Shuji HATA

目　　的

フットボールのゲーム程，今日の英国の生活と同じように国民の生活と密接に関係してきた事例はほとんどなかった。無数の大人や少年たちがフットボールのゲームを行っている。これらの大部の者たちにとってフットボールは生活の第一の関心事の一つである。このような状況はどのようにして生じたか。その問題については確かに考察するに値する。しかも，充分奇妙なことであるが，フットボールの社会史については充分に研究されてこなかった。フットボールに関しての数えきれない程の書があり，毎年，新しい書が出版されている。しかし，これらはそのほとんどがゲームのテクニックを取扱っており，歴史についてはごく最近の些細な事項しか扱っていない。共同社会の生活との関連でのフットボールの話はほとんど触れられていない。

1954年に Morris Marples によって，A History of Football の書が，London のSecker & Warrburg より公刊されている。

この書の目的は，このむしろ不慣れな角度からフットボールを論ずることにある。その目的のためには資料に不足はない。初期の時代の資料は当然のことながら，若干乏しいが，世紀が進むにつれ，特に16世紀から，それが益々充分になり，19世紀後半までは資料が極めて豊富になり過ぎて，すべてのものを精査することができない程である。

この問題を充分論議しようと試る者は誰でも初期の時代については，その大部分を1938年に Kölner Anglistische Arbeiten から公刊された F. P. Magoun 著書の History of Football from the beginnings to 1871 に頼らなければならない。その書は，数世紀を通してのフットボールについての夥しい数の文献と言及を収集している。Marples は Magoun によって引用された資料を多量に引いてきた。しかし，Marples の結論は，それらが時々，Magoun と一致することがあるが，彼自身の結論である。

Marples は，A History of Footbll の第一章，The Origins of Football（1～18頁）において英国におけるフットボールの起源について詳細に記述している。

フットボールの起源について，極めて多くの無意味な理論化がなされてきた。一見たところでは，起源についてより多くのことを費やすのは無益であるかもしれない。しかし，その長い歴史について考察する際，誰がフットボールを考案したか，フットボールはどこで始まったかなどの質問をせざるを得ない。そして，少くともその解答を出すよう試る価値はある。この種の問題において，もっともらしい推測しかめざすことができないのはもちろんのことである。というのは，確実な知識がまったくないからである。如何なる説を採択しようとも，それに対する反証がある。しかし，とにかく諸々の説を列挙し，証拠を収集することができるのであるが，それ自体は興味のないことではない。その場合，他の問題が生起するが，それらに対しての考え得る解答のいくつかは不合理に見えることがある。――例えば，フットボールは単なるゲームと言うよりは，むしろ，異教的儀式又は

呪術として始まった。あるいは多分にフットボールは本質的には，地域社会の間の一種の形式化された戦闘又は象徴的戦争であるとかである。確かなのは，フットボールが最初に筆記された記録ではっきりと現われたとき，それは極めて乱暴で規律のないゲームとして現われた。しかし，その時までには，すでに数多くの世紀，多分1000年の歴史があったし，フットボールは紀元後12世紀までに荒っぽいゲームになったという事実がある。

そこで，本研究は，Marples 著書のA History of Football の第一章，The Origins of Football を取りあげ，Marples の見解に基づいて，英国のフットボールの起源について追究するものである。

本　論

I　ローマ説

フットボールはローマ人によって英国に紹介されたと William Andrews によって独断的になされてきた。「フットボールはローマ人によって英国に紹介されたもので極めて古いスポーツである。」と，彼は Old Church Lore (1801)[1] において叙述している。その意見は確かに古いものであり，多分にイタリア・ルネッサンスの医学教授である Mercuriali に溯るが，彼の著書である De Arte Gymnastica (1569)は，Mulcaster や16世紀の他の英国のスポーツ作家に影響を及ぼした。Girolamo Mercuriali (1530—1603)はローマのゲームであるハルパスツームとイタリアのフットボール，つまり Calcio とを等しいものと看做しているが，ハルパスツームは小さなボールで行われるが，Calcio は大きなボールで行われると慎重に指摘している[2]。Bishop Cooper は Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae (1573)において，ハルパスツームを「foot ball のような大きなボールで行う競技」としている[3]。オランダ人の牧師である Daniel Souter は Palamedes, sive de Tabula Lusoria, Alea et Varris Ludis (1622) において，古代人の間で用いられた様々な種類のボールについて言及し，「第四種のボールはハルパスツーム（英国の foot-bal と称せられる）であった。」と叙述している[4]。16，17世紀の英国の権威者はハルパスツームとフットボールはすべての要素において同一のゲームであると看做していたことは明らかであるが，ローマ人によってゲームが英国に移入されたとは彼等の誰も明確に述べていない。

実際，ハルパスツームとはどんなゲームであったか。現在まで残ってきた数少い文献から，ギリシャそしてローマのゲームを復元するのは極めて難しい。しかし，ハルパスツームについて考察する際，短篇の物語が二つある。一つは，ギリシャの喜劇作家の Antiphanes (c. 388—311 B.C.)の未完遺稿であり，他の一つは，フランス・ローマ人の Sidonius Apollinaris (c. 430—479 A.D.)によるものである[5]。

ハルパスツームはチームゲームであり，長方形のフィールドで行われ，センターラインとベースラインの2本があった。そのゲームの目的はボールを相手方ベースライン後方に投げて落とすことであった。ボールはプレイヤーからプレイヤーへとパスされた。ボールは1回バウンドしても摑むことは許されたが，2回バウンドするとボールはデッドになった。如何なる形式のキッキングも無かったようである。ある形態のタックルは許されていた。というのは，相手を抱え込んでいるプレイヤーが記載されているからであり，この関係においてレスリングの用語の使用はコーン・ウォールのハーリングを思い出させる（これらのうちの3つがあるが，つまり，hug[6], counter-grip[7], そして necking つまり scragging[8] である）。このハルパスツームのゲームに適用されることのある一般的な用語である sphaeromachia，つまり ball-fight は，それが有する激しい性格を証明するものである。

プレイヤーの役割はある程度まで分化されていた。というのは，足の速いプレイヤーはベース・ライン（ラテン語では locus stantium ——立っているプレイヤーの位置——として知られていた）近くに位置したが，他のプレイヤーは

フィールドの中央（area pilae praetervolantis et superiectae と称せられ，ボールが空中を飛んで通過したり投げて越されるエリアである）に留った。さらに，ラテン語で medicurrens, 英語で 'in-between man' と称せられるプレイヤーが居たが，そのプレイヤーについての役割は不明なままである。これらの者のうち唯一一名が，センター・ライン上あるいはその周辺で動きまたっていたようであり，そのプレイヤーは他のプレイヤーを抱きかかえたり，ボールが飛んで通過するか投げ越されるときそのボールをインター・セプトするとして叙述されている。又，彼がフットボールの用語を用いると「selling the dummy[9]」に極めて似ていたことをしたかもしれない。というのはある一つの叙述は，彼について，あるプレイヤーにボールをパスするふりをして，別のプレイヤーにパスしていると言及しているからである。'in-between man' にはゲームの重要な特徴があったに違いないが，そのプレイヤーが果たした正確な役割については誰も満足のいく説明を与えなかった。彼には，所謂 'innings'[10]があり，得点されるごとに他のプレイヤーのために退いたと示唆されてきた。しかし，彼がチームのどちらかに属したか，あるいは双方のチームの throw を公平にインターセプトしたかについては不詳である。

Antiphanes は実際に行われていたハルパスツームのゲームについてうまく描写している。

> ボールをキャッチすると，そのプレイヤーは，喜んでそのボールを仲間にパスするが，同時に，一人から離れ，もう一人を撃退し，もう一度，「パスを出せ。長いパスを投げよ。彼を抜け。下がれ。上がれ。短いパスだ。パスで戻せ。戻れ。」としわがれた声で叫んで，第3番目のプレイヤーを激励する。[11]」

これは，とにかく，ゲームの何か精髄らしきものを残しているが，規則については明らかでない。

ハルパスツームはフットボールの原型と看做されてきたゲームである。確かに英国においてローマの軍人あるいは役人たちが行っていたに違いなく，多分に彼等からローマ化されたブリテイン人がこのゲームを学んだに違いない。しかし，その詳細事を考察してみると，それは実際にはプリミティブなフットボールのようなものでなかったことがわかる。ハルパスツームは1602年に公刊された Survey of Cornwall において Carew が叙述したように，hurling to goals に密接な類似性があるようである。ハルパスツームとハーリングの両方において小さくて堅いボールを用いたが，そのボールは投げられたりパスされたりするが，決してキックされることはなかった。そして，両方のゲームにおいて，足の速いプレイヤーはベース近くに集っているが，他のプレイヤーは，mid-field で動きまわっている。唯一，著しい差異があるが，それはハーリングでは，'in-between man' に相当するものは何もないことである。この二つのゲームは Pope[12] の作であると言われている Memoris of Martin Scriblerus (1741) において，実際に実証された[13]。しかし，その証拠を認めるとすれば，ローマのゲームであるハルパスツームが英国の一部にしか残存しなかった理由を説明する必要がある。アングロ・サクソンの侵攻のため西部へ放逐されたと示唆するのは容易であるが，そうであるならば，又，何故，ウェールズ，Cumberland あるいはスコットランド西部などの二，三の他の地方に残らなかったのかの説明が必要となる。しかし，ハルパスツームとハーリングにはあるにせよ極めて隔った関係しかなかったこと，そしてこれらの類似性はボールを用いるすべてのゲームには必ずいくつかの共通性あると見れば，多分にそれで充分であろう。

この関係において古代スパルタ人は英国のフットボールにまったく影響を及ぼさなかったことが確証できるが，しかし，古代スパルタ人は英国のプリミティブなゲームとの共通性が非常に多くある一種のフットボールを行っていたことを言及する価値がある。それについてはほとんど知られていないが，少年又は若者によって行われ，双方のチームは約15名から成り，その目的はボールを確保することで，制限時間にな

った時にボールを所有していたチームがそのゲームの勝者であったようである。

ローマには，様々なタイプのボールを必要とする他のボール・ゲームがあったのであるが，Martial は二行のエピグラム[15]の中でそれらのゲームを祝った。そして，これらのうちのいずれかが，フットボールの起源であると言える。しかし，それらについてはほとんど知られていないので極めて試験的な意見しか可能でない。一つのボール・ゲームの名称である pila paganica, つまり village ball は，すすぐに，フットボールがしばしばそうであったように，村全体で行われていたゲームを示唆するようであるが，Martial はボールには羽毛が詰められていたと叙述しているので，そのボールはフットボールのような激しいゲームにはほとんど適さなかったと言える。もう一つのボール・ゲームである follis はよりフットボールに近かったようである。というのは，それは大きなボールであり，膨ませた膀胱を皮革で包んでいたからである。しかし，それがすべての類似したフットボールのゲームで用いられた証拠はまったく無く，後世になって 'follis' の語が 'football' と同一に看做されるようになり，Martial は，'follis' は老人や少年には適するが，壮年男子には適さなかったと示唆しているのであるが，それ自体が，フットボールと同一であるとは，実際には認めていない。一般的に，pila paganica と follis の両者とも2，3名のプレイヤーしか参加しなかったゲームであったので，多数が参加した唯一のゲームはハルパスツームであった可能性があると見られる。

II　アングロ・サクソン説

次にローマの権力の衰退とノルマン人出現までの間を満ちあふれさせたアングリア人[16]，サクソン人そして他の人々の主張を考察しなければならない。これらは，彼等がやがてノルマンの征服者たちを吸収したように，初期の住民を放逐し，破壊しあるいは吸収しながら最終的に英国民になった人々であった。

後世になってのフットボールの地理上の分布は，一瞥するとフットボールは起源的にはケルトというよりはむしろアングロ・サクソンに属していたことを示唆している。およそ19世紀中期までフットボールは何百年にも及んでイングランドやスコットランド東部の至る所で行われていたが，コーンウォール又はスコットランド北部や西部では行われていないこと，そして，Cumberland やアイルランドでは少ししか行われていないことがわかる。特に，東アングリアとスコットランド国境地方の二つの地域は，極めて古い原住民の産物と看做されていたその地特有のゲームを誇りにしていた。東アングリアには，campball 又は camping があったが，その名称は他ならぬゲルマンの起源を示唆している。一方，Northumbria[17] の人々が住みついたスコットランド国境地方は，いまだに，伝統的なボール・ゲームに固執しているが，現在ではそのゲームから上下肢の危険性を減少させるためにキックの要素が除去されている。後世になって様々な形態のフットボールが行われた地域と初期のアングロ・サクソン王国の，特に Mercia[18] や Northumbria の地域とに重要な一致が見られるのは確かである。

この関係において，少くとも二つの地域においては地方の Shrovetide[19] のあるいは他の祝祭のフットボールは，サクソンの起源を持つと，特に考えられるかもしれない。地方の Shrovetide のフットボールは，戦争に敗れたデンマークの指導者の首が街路を蹴りまわされた1000年前の事件を象徴化したものであるという考えが，18世紀末に Kingston-on-Thames において広まった。フットボールを行ったために告発された人々は，前述の儀式を祝っていたと弁明し，従って，正式に無罪になった[21]。同様な話が，Chester[22] におけるゲームの起源を説明するために語られている[23]。

これらの物語はアングロ・サクソンの仮説に一致する。なぜならば，それらのものは，フットボールはデンマーク人が Mercia や Wessex[24] を侵略した時代に，つまり約3世紀ごろアングロ・サクソンの人々の間で始まったことを意味

するからである。しかし，それらに多大の重要性を持たせるのは賢明ではない。というのは，それらを他のものと比較することが可能であり，それらは実質的には同一であるが，証拠としてはまったく受入れられないからである。1796年，Scone[25]で流布していたものによると，かなり昔に，イタリアの敗北を祝うために，地方のゲームが教区民の一人によって始められたと言われていたが，それがスポーツによってかあるいは格闘技[26]によって祝われたかについては示されていない。1829年の Derby[27]におけるものは，フットボールのゲームの起源を3世紀のローマの敗北に帰している。より詳細に言うと，Derby の歴史家である Glover はフットボールのゲームの起源を A.D. 21年の事件に帰している[28]。その事件とは，ローマの軍隊が，住民によって，Devontio の町つまり Little Chester から追放されたり，多分に撲滅されたと言われる事件である。しかし，このような話は，著者が疑わしく，その四つは，現在では，多分に地方の古物研究家の推測による比較的現代の因果関係学の神話であろう。

所謂フットボールの起源をサクソンとする伝統を無視するにせよ，その仮説は表面上はいまだに説得力あるものであるようである。しかし，考慮すべき他の事実があることは言うまでもなく，それらは描いた構図に適合させることができないので，その特定の構図を描くためには，それら他の事実を故意に無視しなければならない。

先ず第一に，障害が二つある。アングル族や他の民族が大陸から彼等とともにフットボールを持込んだとすれば，彼等の本来の国において何らかのフットボールの痕跡を発見することが可能であるが，彼等がその国でフットボールに熱中していたという証拠はまったくない。彼等の本来の国においてプリミティブなフットボールの痕跡がまったく残っておらず，彼等の現代の子孫はまったく近年になるまでフットボールのゲームに少しも関心を示さなかった。フットボールが海外から英国に持込まれようと英国で考案されたにせよ，フットボールがサクソンのゲームであるとすれば，アングロ・サクソンの文献あるいは記録の中にフットボールについての少くとも若干の証明可能な言及を見出せるのであるが，実際，ノルマン征服以前のフットボールについての言及であるとされる文筆上の言及は，多分に，一つしかなく，そして，それはサクソンと言うよりはむしろケルトのコンテクストにおいてである。言及されているようなサクソンのスポーツはまったく異った性格を有しているが，それは狩猟や戦時における武器の取扱いに関するものばかりである。

第二に，例えその重要性がどんなものであるにせよ，マス・フットボールが英国で行われていた初期の世紀，マス・フットボールとほとんど同じであるスールとして知られるゲームが，フランスで，特に Normandy[29] や Brittany[30] で盛んに行われていたという極めて重要な事実である。マス・フットボールとスールの二つのゲームは非常に似通っているので，その起源は共通であると言っていい程である。事実，それらはどの点から見ても同一のゲームである。フットボールについて説明する如何なる説もスールについても説明しなければならない。このことは，フットボールのゲームがアングル族によって英国で確立されたあとフランスの移入されたと考えることができないとすれば，ただちにフットボールの起源をサクソンとする説を問題にしなくするのであるが，フットボールがフランスに移入されたという可能性は，フランスでのスールのゲームについての最初の記録は英国のフットボールについての最初の記録より以前ではないにせよ同じ位であるという事実からみて，その可能性はないようである。

III　ケルト説

フットボールの起源をケルトとすると説は極めて多くの証拠によって支持されるが，その多くは直接と言うよりはむしろ状況的なものである。しかし，かなりの重要性が置れるものである。先ず第一に，スールは英国のプリミティグなフットボールと多くの共通性を有していると

いう事実がある。事実，その主なすべての特徴はその類似性を示すことが可能である。それは英国の多くのゲームのように敵対する地域や村，時には町対在の間で郊外で行われた。参加者の人数の制限はなかった。競技は野蛮で乱暴なものであり，激しいメーレーやスクラメージがあった。water-play やある場合には water-goals が習わしであった。これらは，昔の英国のゲームすべてに共通する特徴であった。ある場合には，スールのゲームはそのことが英国での若干の記録されている例にあったように新婚の人々によって開始された。時々，ボールは明るい色で塗装され，まさに Ashbourne[31], Jedbargh[32] そして Atherstone[33] での昔の英国のフットボールのように細長いリボンをつけていた。極めて確かなことであるが，スールは，英国でのマス・フットボールのように，決定的でないにせよ，極めて Shrovetide のゲームに近いものであった。

さらに，これらの類似性は，スールと昔の英国のフットボールの間にあるだけでなく，ブリテイン島の南西部地方で行われていたある種のマスのチーム・ゲーム，つまりコーンウォールのハーリング，ウェールズのナッパンそしてアイルランドのハーリングの間にもあった。しかし，これらのいずれのゲームもフットボールではなかった。コーンウォールのハーリングやナッパンでは，ボールはキックされると言うよりは投げられているが，アイルランドのハーリングではホッケーのようにスティックが用いられている。しかし，他の点では，競技のやり方やそれに関する習慣や伝統ではスールに非常に似ている。スール，コーンウォールのハーリング，ナッパン，アイルランドのハーリングなどのゲームが英国のフットボールが，それらが相互関係がいにしても，とにかく密接な関連をもって発達し互いに影響及ぼしあったという印象に抗するのは容易でない。このことを認めることができれば，それらすべてのゲームをケルトの起源とする可能性があるようである。というのは，それらのうちの三つ，つまりコーンウォールのハーリング，ナッパン，アイルランドのハーリングは，アングロ・サクソンの侵略者によって決して侵略されることのなかったケルトの本拠地だけのゲームであり，スールはケルトの人々が侵略者から海外へ脱れた地域で盛んであったからである。問題があるのはもちろんのことである。例えば，この説についてどのようにして，東アングリアの camp-ball，英国の他の形態のフットボール，そしてスコットランド国境地方のボール・ゲームについての説明するか求められるならば，英国においては侵略者の奴隷として定着した表面下のケルトとともに生残ったに違いなく，そのゲームは，その両国の間で密接な接触のあった後に，フランスからスコットランドに紹介されたかもしれないとしか答えることができない。Normandy と Brittanyの二つの地域は人種的に極めて異っており，初期の世紀には互いに紛争していたという事実にもかかわらず，何故スールが Brittany と同様，Normandy で行われたかの説明を求められたら，スールは後になって Normandy に伝播したに違いないと述べなければならないだろう。しかし，そのような説明は，多分に不充分なものである。しかし，フットボールの起源をケルトにする仮説は，それを推奨するだけの価値があるので，その点に関する限りそのように主張するのを正当化する。

事実，文献上の証拠は極めて少い。フットボールの起源をケルトとする説を裏づけるのに用いられると思われる文献上のコンテクストはたった一つしかない。これは，19世紀の年代記作者である Nennius が，著書，Historia Brittonum における少年たちが ludus pilae（ボール・ゲーム）で喧嘩している叙述である[34]。その出来事は5世紀のものであり，その詳細事が真に5世紀のものであって，年代記作者自身の時代からの時代錯誤的な転送でなければ，確かにそれ位初期にケルトの若者がある種のチーム・ゲームを行っている姿が想像される。現代の学者はそのシーンが正真正銘のものであると信ずる傾向にある。彼等の見解では，Nennius は，Monmouth の Geoffrey のような他の年代記作者と違って，自由の思いのまま発明するとか即興す

るとか言った才能がなかったので，彼は，すべての資料を彼以前の権威者から引き出したとしている。であるとすれば，この ludus pilae が5世紀のものであって9世紀のものでないとすれば，それがフットボールであり得たという如何なる証拠があるか。フットボールを全般的なコンテクストにあわせたこと，そして後の世紀においてしばしばフットボールに適用された ludus pilae の表現を用いることより他のことは何もないことを卒直に認めなければならない。この ludus pilae は他のある種のゲームであり得たし，その状況にあてはめられると思われる他のゲームがある。それらのうちの一つが，それがコーンウォールの又ははアイルランドの変形であろうとハーリングであっただろう。この時代ごろに，アイルランドでは，少年たちが伝統的なアイルランドの形態のハーリングとして現在看做されているものをすでに行っていたことがわかる。Lady Gregory は，Cuchulain of Muirthemne において，12世紀はるか以前の写本から翻訳するか書き換えて，7才の英雄の Cuchulain が宮廷での教えを受けている王や貴族の子息たちに自分の銀製のボールとハーリングのスティックを持ってどのようにして加わったかについて叙述している。この訓練は主として athletic であり，その中でもハーリングのゲームから成っているのであるが，Cuchulain がその場に着いたときすでに行われていた。

> 彼は彼等の中に進んで行き，ボールを足もとに置いて，彼等をかえりみず，ボールを押し進めボールをゴールに入れた。[35]

そのコンテクストは，Nennius の中の一つを思い出させるが，彼等少年のうちの何名かは，Cuchulain や彼の友人のように貴族出身であった。ここで言えることのすべては，5世紀までに英国の少年たちはアイルランドのように，フットボールであったかもしれないチーム・ゲームを行っていたが，それは多分に，ある形態のハーリングである可能性が強かったと言うことである。しかし，この結論は曖昧であるが，そのことは，ハーリングとフットボールの両者がが属する様式のチーム・ゲームは，英国においてはすでに紀元後5世紀に行われていたことを示すのに役立つ。それらが示唆されるように，共通の起源を有するとすれば，それはこれよりかなり前に位置されなければならないだろう。

〔IV〕　異教的儀式の名残りの説

フットボールの起源をケルト又はアングロ・サクソンとする説や他の諸々の説にたいしてまったく異ったもう一つの接近法がある。この考えは，フットボールを，起源においてはローマよりずっと以前の時代か少くともローマと同時代に属し，それらははるか昔の時代以来毎年行われてきており，長い年月を経てその意義を失ってきているが，まだある場合にはその本来の目的の痕跡を残しているプリミティブな異教的儀式の名残りとして説明している。これは，こじつけに聞えるかもしれないが，興味深い証拠によって裏付けられているので，充分，追究する価値がある。

第一の場合，フットボールのゲームは現実に，人，家畜，農作物などの生産性の向上を計る呪術的儀式であるかもしれないとする理由がある。その説は，W.B.Johnson によって詳細に研究されてきた。[36] 彼は，多くのプリミティブな儀式において，円又は球状の物体が生命をもたらすもの，そして発達を促すものである太陽を象徴するために用いられると指摘している。様々なプリミティブな人々によって円盤が木にぶら下げられるか丸い石が農作物の間に埋められるのであるが，その両者ともが日光をもたらすためである。アイルランドのある村では，太陽と月を表わす金と銀製のボールが May Day[37] に持運ばれる。オクラホマでは，インディアンは収穫を祝うためにフットボールのゲームを行う。そして，ボールが太陽を象徴化して以来，ゲームは東西で行われる。これら儀式すべての類似物が英国のフットボールやそれに血縁関係にあるゲームについての物語の中で見出されるのは明らかである。事実，一本の木がゴールになることが時々あった。そのゲームの目的はボールを地面に埋めることにあったが，Scone (1796) では

地面に堀った穴にボールを三度入れなければならなかった[38]（この意味においてゴルフも又生産性の儀式の名残りである）。Chester[39]（1539），Dublin[40]（1569）のように明らかに意味のない儀式の一部として，あるいは Bouloguela-Grasse[41], Yetholm（1920）[42] そして Dorking（1887）[43] のようにフットボールのゲームの準備としてボールが実際に町あるいは村中に持運ばれている。コーンウォールそしてアイルランドのハーリングとも，銀製のボールが用いられた。ゲームは南北と言うよりは東西で行われることが極めて多かった。この考えの線に沿って，Johnson は同じ方法でフットボールの他の様々な特徴について説明している。ゲームの目的がボールを確保して，そのボールを教区内に持込むことであれば，その意味するところは，農作物の生長を確実にするために太陽を確保して家に持帰ることであるのは明らかである。彼はフランスのいくつかのゲームと同じように，スコットランドや北部地方の特徴と極めて共通しているボールが水に浸されたり沈められることでさえ，どこか他の場所でプリミティブな儀式で強調される関係である生産性を向上させる際の雨と太陽の関係にまで追求しなければならないと示唆している。

いくつかの興味深い迷信もフットボールを農作物の生産性と関係づけている。Whitby[44] では昔から，Shrove Tuesday[45] のフットボールで役立たなかった若者は次の収穫においても役立たないだろう[46]と信じられていた。Normandy では Shrove Tuesday のフットボールで勝ったチームは，その時節が来たとき cider-apple のよりよい収穫が約束されると信じられていた。ここで，よりよい収穫はその年の初めの象徴する太陽のよい管理にかかっていることがわかる。Devonshire[47] の迷信によると，Good Friday[48] にポテトを植えたあと野原においてフットボールを蹴る必要があったが，それは同じ理由で，つまり，太陽が必要とされたのは明らかである。[49] このことを Hampton Wick[50] で記録されている教区の境界でフットボールを蹴る習慣[51]あるいは Bodmin[52] のように境界をたたきながら様々な場所でハーリングを行う習慣を関係づけるかもしれない。そうであるとすれば，その目的は太陽を野原に持って来て，その影響を教区全体に向かわせることによって生産性と生長を確実にすることである。

生産性との関係を示唆する他のフットボールの習慣がある。Shrove Tuesday のフットボールでは，双方のチームがそれぞれ妻帯者と独身男性から成ることは珍しいことではなかった。その習慣については18世紀その後，主としてスコットランドや北部地方から記録されているが，コーンウォールや Normandy からも記録されており，さらにそのような習慣は1600年の英国の喜劇においても言及されている。そのようなゲームは，今日の村祭りでの同じようなコンテストのように単なる即興的冗談の結果ではなかった。18世紀末，Inversk[53] において，既婚の女性と未婚の女性間で年に一度のフットボールの試合が行われ，既婚女性が常に勝ったが，既婚女性が常に勝ったという事実は，これはその語の適切な意味のコンテストでは少しもなく，儀式であり芝居じみた行事の一例であった。

極めてよくあることであるが，Ancrum[54] や Bowden[55] でのように[56]，新婚夫婦によって，あるいは Cor.fe[57]（1553）のように[58]，一番最近結婚した男性によって又は，Brand（1777）[59] が叙述した匿名の村でのように，新郎すべてによってボールが準備されるのが習慣であった。1539年の Chester では，年内に結婚したすべての男性は象徴となる絹製のボールを準備しなければならなかった[60]。時々，ゲームは，Bowden のように[61]，婚礼を挙げた後の新郎によって，あるいは Normandy の Vieux Point のように一番最近婚礼を挙げたばかりの男性によって[62]，又は婚礼を挙げたばかりの女性がボールを教会の土に投げることによって妻帯者と独身男性の間の試合を開始したところの La-Lande-Patrie[63] のように，一番最近婚礼を挙げた花嫁によって[64]，あるいは Charmes[65] のように[66]ボールを順々に投げ上げた年内に婚礼を挙げたすべての者によって開始されたかもしれない。これらのすべては，偶然によることがないのは確かであり，生産

性の儀式は，フットボールがその一つであるとすれば，既に繁殖力に富んでいるか富もうとしている人々に関係づければ，より効果的であるだろうという意味あいを有しなければならない。

E.K.Chambers によってフットボールについていくらか異った解釈が試みられてきた[67]。彼の見解では，ボールは太陽でなくて生け贄の獣の頭を表わしており，プレイヤーの目的はボールを獲得してそれを彼等の土地に埋めて農作物の収穫を高めることである。この目的を持った秩序のないスクラメージがインドの村祭りの一部を形づくるものとして，実際に記録されており，Chambers は，フットボールをただ単にこれより手を込んで改良したものであると看做している。彼は自己の説を二つのプリィミテティブな村のゲーム又は儀式について言及することによって裏付けるのであるが，事実，それらのものはフットボールではないが，明確な関係を示る程充分，フットボールに近いものであり，同時に，それらは生け贄の獣の痕跡を残している。Hallaton[68] では，Easter[69] の日曜日に，現在でも兎が行列をなして運ばれる。そして，その目的が木製の field-bottle をそれぞれの村に蹴り込むことである "bottle-kicking" として知られるゲームが，Hallaton と Medbourne の間で行われたあと，うさぎパイの争奪戦がある。この場合，生け贄の獣の一部を象徴しているのは bottle である。他の例は，Epiphany[71] に Haxey[71] において行われた有名な Haxey Hood game である。この場合，プレイヤーの目的は，hood としめ知られる一巻の粗製麻布又はなめし皮をそれぞれの村に運ぶことである。hood の持つ真の意味又は正体は，その前日に行われる Plough Monday[73] の儀式での役員の一人である道化によってなされた演説において表わされている。

我々は，雄牛二頭とその半分を殺した。しかし，もう半分は野原に残して来なければならなかった。欲しければ，行って取って来ることができる。次のことを忘れるな。それは，家対家，町対町であり，人に会ったら，その者をなぐり倒せ[74]。

と彼は叫んでいる。

このことから，hood が去勢していた雄牛の半分，つまり生け贄の獣の一部を表わしているのは明らかである。このような解釈をどんなフットボールのゲームにもあてはめることが可能であったとするのは容易であるが，それを受入れるには少し懐疑的に感じざるを得ない。これが，正しい説明であるとすれば，フットボールの真の目的は同じままである。つまり，フットボールは，彼等の土壌に肥沃をもたらす方法，この場合，生け贄の獣の一部を得るための敵対する二つの地域共円体間の争いである。

フットボールはプリミティブな儀式の名残りであるという説をさらに裏づける際に，フットボールはShrovetide と極めて密接な関係があるという事実がつけ加えられるかもしれない。数多くの Shrovetide の他の習慣や儀式——cock-fighting, cock-throwing, hen-threshing, bell-ringing, eating of pancake, eating of dumpling, stone-throwing, Holly-Boy[75], Ivy-Girl[76] などの儀式——があるが，それらのものすべては，相当の確信をもって，まさに他のそのような儀式が他のキリストの祝祭に加わるようになったように，数世紀の間表面下にあった名残りであったあと，Shrovetide のキリストの祝祭と関係づけられるようになった異教的儀式として説明されてきた。それらすべては，本来の意義や目的を持っていたと思われる。例えば，cock-fighting, cock-throwing, hen-threshing は清めの儀式の例として，bell-ringing は悪魔払いとして，stone-throwing は儀式的戦闘として説明されてきた。フットボールは，本来は生産性を向上させるための儀式であるとかあるいは，敵対する二つの地域共同体又は部族間の儀式化された闘争であったという説は，この構図にぴったりとあてはまる。Shrovetide は春の祭りであり，生産性の儀式の適切な機会であるので，なお一層この構図にあてはまる。

しかし，この特定の論議を受入れるならば，フットボールは他の儀式や習慣とともにノルマン征服以前の英国の Shrovetide の祝祭の一部

を形成したと看做されなければならないが，この証拠はまったくない。Shrovetideのフットボールの記録は，William Fitzstephen が Norman-London の有名な叙述を公刊した1174年より以前にはまったくない[77]。そこで叙述されたゲームでさえフットボールと同一ではあり得ないことは確かである。このあと，Shrovetideのフットボールは他の祝祭の日に行われたと言われているが，16世紀まで英国の Shrovetide のフットボールについての言及はまったくない。そればかりでなく，他の形態のお祭り騒ぎがノルマン時代以前の Shrovetide と関係があったことを示唆するものは何もない。サクソンの Shrovetide は，その名が意味するように Lent の準備における告解の期間であったようであり，フットボールあるいは他の如何なる形態のスポーツの機会でなかったのは確かである。謝肉祭の精神がどのように，あるいはいつ英国の Shrovetide と関係するようになったからは確かでない。起源からいって，謝肉祭はローマの Saturnalia[78] の伝承であり，それ自体が放縦とお祭り騒ぎの期間であった。その類のことが，英国で聞かれるはるか以前は，年一度定期的に行われる祝祭が Lent の励行の前の最後のはめをはずしての遊びの特徴であったところの特にイタリアやフランスの大陸での習慣になっていた。フットボールの歴史家である Magoun はこの謝肉祭の精神はフランスからノルマン人とともに英国に到来し，ロンドンにおいて確立し，次に Shrovetide を祝う厳格なサクソンのやり方をおおい隠しながら，英国中に拡がったと示唆した。彼は英国での謝肉祭についての最初の言及は，前述の Fitzstephen のすべての句において見出され，1174年以前には謝肉祭については何も知られていない事実を指摘している[79]。

〔V〕　ノルマン説

次に最後の説を得るのであるが，それは英国のフットボールの起源をノルマンによるとする説である。というのは前述の論議において何かあるとすれば，一方では，サクソン以前の名残り，多分に英国に特有の有史以前の儀式としてフットボールを考え，フットボールは英国人たちが採択した謝肉祭の一部としてノルマンとともに英国に達したかもしれない可能性について考察する必要があるからである。このことは，次の事実，つまり，フットボールについての文献はたった一つしか存在せず，ノルマン征服以前にフットボールを行ったという文献は極めて疑しいという事実を説明するだろうが，Fitzstephen の若干疑しい言及に始まる1066年以後の世紀において，それは，益々興味深くなる。それは又，中世にフランスにおいて，その詳細事において英国のゲームと同じフットボールが行われていたことがどのようにして生じたかをも説明するだろう。このことを可能にする如何なる説をも注意する価値がある。

この特定の仮説は中世の英国と同様，中世のフランスの歴史に精通している権威者である J.J.Jusserand の裏付けを得ているのであるが，彼の見解を重要視すべきである。彼はフランスと英国のゲーム間にある数多くの類似性について指摘し，可能な唯一の説明は，両者は起源が同じであると言うことであると示唆している。彼は，フットボールは英国より前にフランスにおいて記録されているので，フットボールのゲームは，最初フランスで発達し，次に英国で発達したという見解をとっている。そのような説明を詳細に解明して，すべての事実を証明する必要がある。そのような場合，ハーリングやナッパンは，ノルマンのゲームを採り入れたと看做さなければならない Brittany から彼等の独創的なインスピレーションを受けたと思われる西部のケルトの間で，別個に発達していったゲームの変形であるかもしれない。東部諸州の campball も，それ自体の独自性を有するが，起源は別であることを示唆している。後になってフットボールがスコットランドに拡まったことも説明を要する。この場合，フットボールの起源をケルトとする仮説においてなしたのと同じ説明，つまり，それはより後世になって，直接フランスから影響を受けたに違いないという説明を採択することができる。しかし，その説が，

概して，英国のフットボールの起源を説明しようと試るものすべてのうちで，最ももっともらしく，Jusserand が示唆しているように，とりわけ英国のゲームであると通常看做されているものの起源はフランスであることが解明されれば，それは若干皮肉的ではあるが，一時的には受入れられるものである。

フットボールがフランスから英国に達したとしても，その究極的な起源，この場合それが大陸に転換されているのであるが，その起源の問題がいまだ残ったままである。起源をある異教的習慣の名残りであると解釈する形跡が強いようである。謝肉祭の全体の経過は，それがローマの Saturnalia から由来するとすれば，そのような性格を有しているのももっともである。しかし，謝肉祭のフットボールははるか溯ってそれをキリスト以前と看做すのを正当化するであろうか。謝肉祭に様々なスポーツが伝統的に行われていたことは知られている。ローマにおいて，特に中世において，ローマ法王たちは，競争や他の競技会を推奨したが，それらがどれ位長くこの季節の祝祭の一部を形成していたかについて知る手だてがまったくない。フットボールは何かこのようなものから脱皮したかもしれないし，あるいは，独自に存在しており，多分に，あとでフランスの謝肉祭と結びつくようになったかもしれない。そうであれば，フットボールはただ単に他の気軽な気晴しのゲームとして位置していたか，あるいはプリミティブな生産性の儀式として，すでにその年のその季節に存在していたので謝肉祭と関係があったか。これらのことは問いただす価値はあるが，答えるのは不可能である。しかし，一つのことは確かである。つまり，フットボールがフランスから英国に移入されたとすれば，それは異教徒的儀式としてでなく謝肉祭のゲームとして移入されたのである。既述された特定の儀式とは別に，Shrovetide のゲームが多くあった。Leicester[80] や Scarborough[81] のホッケー，Leicester の battledore and shuttlecock[82]，Bury St. Edmmunds での Trap-ball[84]，北部地方の nurr-and-spell[83]，Chester のアーチェリーなどは Shrovetide と特に関係のあった若干のスポーツ活動である。これらのいずれもが，確かに，如何なる儀式的な意味をまったく有していない。それらのものは，そのほとんどが同時代の間，他の土地での休日に習慣的に行われていた事実から極めて明確であるように祝祭の日の適当な楽しい気晴しにか過ぎなかった。このことは，Shrove Tuesday に加えて，キリスト教やキリスト教以前の両方での極めて多くの祝祭日と関係があったフットボールにもあてはまる。フットボールは，ただ単に祝祭日が休日であったのでこれらの日に，とりわけ，Shrove Tuesday は，生徒，徒弟，熱心なフットボール選手のための伝統的な休日であったので，Shrove Tuesday に行われた。

しかも，これらすべてにかかわらず，Haxey Hood game や他の仮説に基づいて，若干の初期の入りくんだ伝統もフットボールの複雑な習慣や慣行にも関係があることを説明するのに容易でない他の証拠によって示唆された可能性がまだ残っている。

ま と め

英国におけるフットボールの起源について，Marples に基ずき，ローマ説，アングロ・サクソン説，ケルト説，異教的儀式の名残りの説，そしてノルマン説と考察してきたが，フットボールの起源について断定できる説がない。

Magoun や Jusserand が正しいとすれば，フットボールのゲームは大陸から英国に移入されたかもしれないし，それらのいくつかは英国固有の起源であるかもしれない。又，フットボールは，古い儀式と新しいスポーツを合併したものであるかもしれない。

注及び引用・参照文献

1）William Andrews, Old Church Lore, London, 1891, p.11; quoted in M.Marples, A History of Football, London, 1954, p.2.

2）Francis Magoun, History of Football from

the Beginnings to 1871, Kölner Anglistishe Arbeiten, 1938, pp.27—8.

3), 4) quated in Marples, op.cit., p.2.

5) G.E. Marindin, The Game of Harpastum or Pheninda, Class. Rev. (April, 1890), pp.145—8: quoted in Marples, op.cit., p.2.

6) 抱き締めること

7) カウンター・グリップ

8) 首を締めること

9) ボールをパスすると見せかけて相手方を惑すこと

10) 攻撃回

11) Autiphanes.〔原典：catching the ball, the player delights to pass it to a colleague, which at the sametime he avoids one, drive back another, encourages a third once more with raucous cries: 'Pass out. Throw a long one. Past him. Down. UP. A short one. Pass it back. Get back.

12) Alexander Pope (1688—1744). 英国の詩人.

13) quated in Marples, op.cit., p.5

14) カンバーランド，英国イングランド北西部の州

15) quated in Marples, op.cit., p.5

16) アングル人：5世紀に Slewick から Britain 島に移住し，East Anglia, Mercia および Northumbria の諸王国を建設した西ゲルマン族

17) ノーサンブリア：イングランド七王国時代の王国の一つ。

18) マーシア：Britain 島中部にあった中世初期のイングランド七王国の一つ。

19) 告解期：灰の水曜日（復活祭前46日目の水曜日で，四旬節の第1日）の直前の日・月・火曜日，つまり五旬節の主日，告解月曜日，告解火曜日を含む期間のことである。

20) キングストン・オン・テムズ：Surrey にある。

21) W.D.Biden, The History and The Antiquities of the Ancient and Royal Town of Kingston—on—Thames (Kingston, 1852), pp.58—9；quoted in Magoun, op.cit., pp.122—3.

22) チェスター：英国イングランド北西部 Chestershire の州都。

23) Montague Shearman, Athletic and Football, London, 1889, p.247.

24) ウエセックス：中世イングランドにあったアングロ・サクソン七王国の一つ。

25) スクーン：英国スコットランド中部，Perthshire にある。

26) The Statistical Account of Scotland XVIII, 1796, pp.88—9: quoted in Magoun, op.cit., p.125.

27) ダービー：英国イングランド中部 Derbyshire の州都。

28) Stephen Glover, The History, Gazetteer, and Directory of the County of Derby, I. i, 1310: quoted in Magoun, op.cit., p.112.

29) ノルマンディ：イギリス海峡に臨むスランス北部の地方。

30) ブルターニュ：フランス北西部でイギリス海峡と Biscay 湾とにはさまれた半島を中心とする地域。

31) アッシュボーン：英国イングランド中部，Derbyshire にある。

32) ジェッドバラ：英国スコットランド南東部 Roxburghshire にある。

33) アサーストウン：英国イングランド中部 Warwickshire にある。

34) Nennivs, H:stor: a Brittonum, trans. J.A. Giles (1921) p.402: quoted in Magoun, op.cit., p. 1.

35) Gregory, Cuchulain of Muirthemne, 1919, pp. 7—8; quoted in Marples, op.cit., p.11.〔原典：He went in among them, and when the ball came near him he got it between his feet, and drove it along in spite of them till he sent it beyond the goal.〕

36) W.B. Johnson: quoted in Marples, op.cit., p.12.

37) 五月祭：古くから5月1日に行う春の祭り。

38) The Statistical Account of Scotland XVlll, 1796, pp.88—9: quoted in Magoun, op.cit., p.125.

39) Oder in the Town Clerk's Office, Chester: quoted by Dyer, p.71: quoted in Marples, op.cit., p.12.

40) E.K. Chambers, I, p.150: quoted in Marples, op.cit., p.12.

41) Jusserand: quoted in Marples, op.cit., p.12.

42) George Watson, Annual Borden Ball—Games, Hawick Archaeological Society, Transactions (Session 1922), p.8: quoted in Magoun, op.cit, p.131.

43) Bye—Gones, 1886—87 (May 18, 1887), pp.310—11: quoted in Magoun, op.cit., p.130.

44) ウイットビー：英国イングランド北部の英国最大の州，Yorkshire にある。

45) 告解火曜日

46) F.K. Robinson, A Glossary of Words used in the Neighbourhood of Whitby, Pt.ii, English Dialect Society, Ser. C, Vol. IV, 1876, p.70: quoted in Magoun, op.cit., p.131.

47) デボンシャー：英国イングランド西南部の州。

48) 聖金曜日：復活祭前の金曜日でイエスの十字架の死を記念する日。

49) C.Torr, Small Talk at Wreyland, 3rd Ser., Cambridge, Eagl., 1923, p.102: quoted in Magoun, op.cit., p.138.

50) ハンプトン・ウィック：英国イングランド南東部の旧州，Middlesex にある。

51) H. Riplay, His. & Top. of Hampton-on-Thames, 1885 p.108:quoted in Marples, op.cit., p.13.

52) Hole, p.57: quoted in Marples, op.c:t., p.13.

53) インバレスク：英国スコットランド東南部の Midlothian 州にある。

54) アンクラム：スコットランドの Borders 州にある

55) ボーデン：英国スコットランド南東部の Royburgh 州にある。

56) George Watson, op.cit., p.7: quoted in Marples, op.cit., p.14

57) コーフ：英国イングランド南部の州，Dorsetshire にある。

58) Farrer, quoted in Marples, op.cit., p.14.

59) Quoted by Watson, op.cit., p.7: quoted in Marqkes, op.cit., p.14

60) Oder in the Town Clerk's offie, Chester, quoted by Dyer, p.71: quoted in Marples, op.cit., p.14.

61) George Watson, op.cit., p.7: quoted in Marples, op.cit., p.14.

62) W.B.Johnson : quoted in Marples, op.cit., p. 14.

63) ラ・ランデ・パトリエ：フランスにある地名。

64) W.B.Johnson : quoted in Marples, op.cit., p. 14.

65) シャルム：フランスの Vosges 県にある。

66) A Thomas, Lejeu de la Soule, Ecole pratique des Haut Études (Annuaire, 1919—20), p.8: quoted in Marples, op.cit., p.14.

67) E.K. Chambers, I, pp.149—51: quoted in Marples, op.cit., p.14.

68) ハラトン：英国イングランド中部の州，Leicestershire にある。

69) 復活祭：クリスマスとともにキリスト教の大祭日でもキリストの復活を祝う祭りで春分後の最初の満月の次の日曜日に行われる。

76) メドバーン：英国イングランド中部の州，Leicestershire にある。

71) 主顕祭：キリストが東方から来た三博士に姿を現わした日を祝う1月6日の祭り。

72) ハークセイ：英国イングランド東部の州，Lincolnshire にある。

73) プラウ・マンデー：主顕祭後の最初の月曜日：その日，特にイングランドの北部や東部において耕作の季節が仮装した農夫や少年たちによって祝われる。

74) 〔原典：'we've killed two bullocks and a half', he cries, 'but the other half we had to leave running field : we can fetch it if it's wanted. Remember it's
Hoose agin hoose, toon agin toon, And if you meet a man, konck him doon.'

75) カイヨウヒイラギで作られた少年の人形：Shrove Tuesday に東ケント州のある村のスポーツに（ivy-girl ともに）姿を現わした。

76) ツタで作られた少女の人形。

77) C.L.Kingsford ed., A Survey of London by John Stow (Oxford, 1908), II, pp.210-29: quoted in Magoun, op.cit., p.3.

78) サトウルナリア祭：古代ローマで12月中旬に数日間に渡って行われた収穫祭で底抜けのお祭

り騒ぎの時期。

79) Magoun, op.cit., pp.134—7.

80) レスター：英国イングランド中部の州, Leicestershire の州都。

81) スカーバラ：英国イングランド北東部, Yorkshire 州東部の港市。

82) バドミントンの前身でインドやアジア諸国で古くから行われたゲーム。

83) ベリー・セント・エドマンズ：英国イングランド東部 Suffork 州西部の都市。

84) トラップの一端のくぼみにボールを置き, 他端をバットで打って空中にはね上ったボールをバットで飛ばす昔の競技。

85) トラップ・ボールに似た北部地方のゲーム。